

# 超低資本状態と内生的割引率の動学分析\*

早稲田大学大学院商学研究科  
清水弘幸†

早稲田大学商学部  
高瀬浩一‡

## 概要

我々は、本稿において動的最適化に基づくマクロ動学モデルの理論分析を行った。割引率一定の新古典派マクロ動学モデルにおいては、資本レベルが非常に低い場合に、最適動学経路を確定できないことが起こりうる。例えば、労働者に対して、ある所与の量の消費を保証するような制約がある場合、一人当たり資本量があるレベルまで低下すると、最適動学経路を導出できなくなってしまう。つまり、経済構造から消費制約を充分満たす生産が可能な資本量だとしても、動学経路がそこで切断されてなくなってしまう、成長経路の理論分析ができなくなってしまう。

この問題を解決するために、我々は、Uzawa(1968)を参考にし、消費量の増減にともない割引率が変化する、可変的な割引率を導入する。本稿では、資本レベルがある一定量より低いときに、割引率が低減するような割引率関数を考える。すると、初期資本量がその量以上の場合、同一の最適動学経路が導出されるが、初期量がそれより低い場合、その各初期資本量に応じて、一本のユニークな動学経路が導出されると予想される。初期量が低いほど、最適貯蓄(資本)量が低くなるような動学経路が想定されるため、恵まれていない状態から出発する経済は、その後の成長も、目標となる定常状態も低くなってしまいかもしれない。

---

\*この論文は清水・高瀬(2008)を修正したものである

† Email: h.shimizu@fuji.waseda.jp

‡ Email: ktakase@waseda.jp